

天和期の芭蕉

——「蕉」の付句をめぐって——

伊 藤 善 隆

はじめに

本稿は、天和二年二月上旬の木因宛芭蕉書簡（後掲）の中に見られる「蕉の付合」を取り上げ、この付合における芭蕉の作意の再検討を試みるものである。

そもそも、この付合は、芭蕉と木因とのいわば私的なやりとりであつたはずの、上記書簡のなかに見られる作品である。しかし後々には、木因系の伝書は無論のこと、他の系統の伝書、作法書のなかにも取り込まれ、広く流布してゆくこととなつた。この付合に見られる一番の特徴は、前句に「蕉」という言葉がすでにあるにも関わらず、付句においても「蕉」という言葉が使われている点にある。もちろん、ここで「蕉」という言葉が重ねて用いられているのは、連句法式上の基本的ルールに違反していることになるのだが、その点に関しては芭蕉にそれなりの考えがあつたといふことが、この付句をめぐる一連の書簡（後掲）を読んでみればうかがえるのである。後の伝書、作法書に書かれている内容には、それら書簡の記述をなぞつた部分も多く、また当然のことな

がらこの付句を称揚する姿勢をとっている。

しかしながら、現代の研究者が著した諸注釈書によれば、それら書簡での飄逸とした芭蕉の書き振りのせいもあつて、この付合は單純な遊戲的趣向を持つものだと考えられており、ここでの芭蕉の意図が改めて問題にされる機会はほとんどなかった。いうまでもなく同字同物を避けるということは、連句を巻く上で一卷の変化のために必要最低のルールである。それを破つてしまつてゐるのであるから、たしかにこの付合は、まともな付合とは言えないものかもしれない。したがつて、これを遊戲的なものと評するのは、もちろん基本的に間違つてはいない見方である。しかしそうであるならば、たとえば、その遊戲的だといふ付合が、多くの伝書、作法書で、至極真面目な態度で扱われているのは何故なのだろうか。今、筆者は、この芭蕉の遊戲がどのような性質のものだったのか、言い換えれば芭蕉はこのような遊戲を何故試みたのか、といふことを改めて考えつつ、この付合に対する筆者なりの解釈を示してみたい。

其返書（に）曰

まず、問題となる一連の書簡であるが、木因宛の芭蕉書簡は現在芭蕉自筆のものが残っており、木因による写しで伝わっている（大垣市立図書館蔵）。これは、他の書簡と共に一巻の卷子に仕立てられており、その卷子の中には、この付合に關わる記述のある書簡がもう二通含まれている。一通は芭蕉の書簡に対する木因の返書であり、もう一通（これは芭蕉の自筆で残っている）は日付も宛名も欠いてしまっているが、やはりその卷子の中に含まれる天和二年三月廿日付の木因宛芭蕉書簡の記述により、当時江戸に居た大垣藩士中川濁子宛の芭蕉書簡であったと推定されるものである。ここではその卷子に拠った『校本芭蕉全集』書翰篇の本文により引用する。

A 木因宛芭蕉書簡（天和二年二月上弦付）
 一日芭蕉翁より文通あり。其書面
 当地或人附句あり。此句江戸中聞人無御座、予ニ聽評望來候へ共、予も此付味難レ弁候。依之為御内議申進候。御聞定之旨趣ひそかに御知せ可被下候。東武へひろめて愚之手柄ニ仕度候。

附句
 蒜の籬に蔦をながめて
 蔦のある花の賤屋とよみにけり
 二月上弦
 はせを
 木因様

B 芭蕉宛木因書簡（天和二年二月下弦付）

花牒拜見、或人之附句貴丈御聞定無之、依之愚評之儀、予猶考ニ落不レ申申候故、乍殘念及返進申候。隨而下官去比在京之節、古筆一牧相求候。此キレ京中定ル人無之候。何れの御世の撰集にや、貴丈御覽候へ、ひそかに御知せ可被下候。花浴にひろめて愚之手柄に仕度候。

菜菔集 卷七

春 俳諧哥

蒜のまがきに蔦をながめ侍りて
 蔦の居花の賤屋の朝もよひ

まきたつ山の煙見ゆらん

二月下弦

木因

芭蕉翁

右趣段もやう心ニ叶申候哉、返翰之感章如左
 C 濁子（推定）宛芭蕉書簡（天和二年三月上中旬筆）

杭瀬河之翁こそ予ガ思ふ所にたがはず、蔦の評、感会奇ニ候。江戸衆聽人なきと申候ハ聊偽、彼翁が心ヲ謀ン為ニ候。爰元ニも珍しきと而已云人三分、同物ニ同物付たる、古今類なきと云捨たる人二分、又道ヲ無して云度事云る、など嘲野輩も適々有之、予ガ心指ヲ了察の士も一兩人ハ有之候ヲ、千里ヲ隔テ自慢云散らしたるも却而愚旨之至ニ御坐候へ共、日来彼翁此道知りたる人と定置候へバ、聊了簡引見ン為、書付遣し申候處、愚案一毫の違無御坐、誠（に）不淺候。
 自慢之詞

古往達人、花に桜を付ルニ同意去ルヲ本意と云リ。増テ鶯ニ
鶯ヲ付て一物別意ヲ付分、當時未來の作者ニ此句ヲ似せさせ
ず、古往今來未來一句の格、何レノ時か秋風來テ芭蕉の露も
ろく破レン迄の一句、一生是のミニ存斗ニ候と書内、鼻高く
をこめき肩のあたり羽だゝきするやうニ候。

以上が書簡の全文である。最初のAの書簡で芭蕉は付句を示し
木因にそれについての見解を求めている。ここで芭蕉は「当地或
人附句あり。」とほけて作者名を伏せているが、Cの書簡を見
れば明らかになように、この付句は芭蕉自身の作である。そして木
因もそんな芭蕉に応じていて、Bの書簡で「乍殘念及返進申
候。」と自分の見解などは一切書かないふりをしており、「菜園
集」なる架空の古筆を持ち出している。しかしながら、もちろん
この和歌にこそ木因の見解が示されているのである。Cの書簡に
示された芭蕉自身の見解は、二つの「鶯」のうちの一つを詞書
中の語、またもう一つを歌の中の語と見立てれば、「一物別意ヲ
付分」たことになるというものであったが、詞書を持つ架空の証
歌を提示した木因も、その芭蕉の趣向を正しく見抜いていたとい
うことであらう。

次に多少煩瑣になるが、これに対する諸注釈書の評価を見てお
きたい。

* 荻野清『芭蕉文集』書簡補注（『日本古典文学大系』 岩波書店、

昭和三十四年）

「併し、このような附合は畢竟壮年の客気が致す所で、またそれ

を誇らしげに報じている点にも、芭蕉の若さが指摘されねばなら
ないであらう。」

* 『校本芭蕉全集』連句篇頭注（角川書店、昭和三十八年）

「……芭蕉のねらいは、鶯に鶯を附けるといふ、連句法式上の同
字同物の難を敢えて犯しながら、而も一つは歌の詞書中の語、他
は歌中の語として、同じ語に「一物別意」（芭蕉の言葉）の働きを
させることによって、きわどく同字同物の難を逃れさせる、その
芸当に在ったらしい。」

* 荻野清『校本芭蕉全集』書翰篇頭注（角川書店、昭和三十九年）

「……（芭蕉がこのような同物・同字の破格を採用して憚らなかつたの
は）同じ鶯にしても、一は詞書中の鶯、一は歌中の鶯で、一般に
非とされる同字の重用と相違することを信じて疑わなかつたから
に外ならない。……所詮は機智の遊びにすぎぬこうした手法を手
放しで喜んでゐるあたり、なお芭蕉の若さと未熟さが指摘されね
ばならない……」

* 阿部正美『芭蕉連句抄』第三篇（明治書院、昭和四十九年）

「……鶯に鶯を付けたながら同物の難を免れるといふ巧みな思ひつ
きはやはり大きな特色といふべく、芭蕉が親友に自慢した心事も
分るのである。壮年の際だけに手放しで自賛してゐるのは寧ろ無
邪氣といつてもよい。……外面的な新趣向ばかりを求めて汲々と
するのは、さして意味のあることではないけれども、これも當時
の新しい風調を模索する俳人達の関心の所在を示すものとして一
顧すべきであらう。」

* 島居清『芭蕉連句全註解』第三冊（桜楓社、昭和五十五年）

「……同じ語に「一物別意」の働きをさせることによって、きわ

どく同字同物の難を逃れさせた、その芸当にねらいがあった。」

以上の注釈に共通しているのは、この付句における作意を「芸当」、あるいは「機智の遊び」、「巧みな思ひつき」であるとしたうえで、そんなことを得意げに吹聴する芭蕉に「若さと未熟さ」、あるいは「無邪氣」さといったものを見ている点であろう。確かに、後年の芭蕉が達し得た芸術性の高みを考えれば、この付句の作意などはいかにも理屈が過ぎたものであって、所詮は「芸当」という程度の評価で済まされてしまふべきものなのかとも思われる。

しかしながら、この付句は現在の我々から見れば「芸当」であり得ても、当時の人々にとっては、必ずしもそうは受け取られなかったものらしい。まず肯定的な反応を示した人はあまりいなかったようであるし、まして木因のように理解を示した人はほとんどいなかったのである。Cの書簡のなかに、「珍しきと而已云人三分、同物ニ同物付たる、古今類なきと云捨たる人二分、又道ヲ無^{ナイザレニ}して云度事云々」など嘲野輩も適々有^レ之、予ガ心指ヲ了察の士も一兩人ハ有^レ之候」という言葉があった。これは、「一兩人」以外は「予ガ心指ヲ了察」する人がいなかったということであるから、「珍しきと而已云人」と「古今類なきと云捨たる人」も芭蕉の理解者とは言ひ難い。まして「道ヲ無^{ナイザレニ}して云度事云々」など嘲野輩も適々有^レ之」という状況である。蔦に蔦を付けた芭蕉の試みを「道ヲ無^{ナイザレニ}」するものと非難する人々もいたのである。芭蕉のこの「芸当」は、当時のすべての人々には素直に「芸当」として受け入れられる性質のものではなかったのである。

三

ところで、このような「道ヲ無^{ナイザレニ}」してしまふ趣向は、芭蕉においてはこれ以前にも試みられていたと考えられる。次に掲げるのは、この付合に先立つこと三年前の延宝七年の発句である。

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

この句の特徴は、「見渡せば」「詠れば」「見れば」という三つの同義語が重ねて用いられている点にある。この部分には、「見渡せば」とは明石より淡路の風景におよべるか。詠ればとは旧事をおもひなかわる心にあや。見ればとは須磨の眼前をいふなるべし。」（『芭蕉句解』大島蓼太著 宝暦九年刊）のように、これら三つの言葉に各々別々の意味をもたせる解釈も存在する。しかし、やはり同じ意を言葉を変えて言ったのであって、三つ全体として「よくよく見る」とか「つくづく見る」などの意味だと取るのが、最も自然であろう。当時、談林調がさかんな頃であり、このように少々奇を衒ったような言語遊戲的趣向は、人々を驚かせ、興がらせたことだろうと思われる。しかし、単に趣向の面白さがあるだけでなく、その主題は「須磨の秋」であり、また三つの言葉は和歌の中でもしばしば使用される言葉であり、それなりの情緒をも感じさせる。ただし、芭蕉の句は、ある特定の和歌をふまえた句作りになっているというわけではない。須磨の秋の情景を詠んだ和歌は数多くあるし、また例えば「三夕の歌」の一つとして良く知られた定家の「見渡せば花ももみじもなかりけり浦の苫屋の秋の夕

暮」の詠など、確かに須磨を詠んだものではないが、秋の浦の情景を「見渡せば」という言葉を用いて詠んだ歌として、この芭蕉の句から受けるイメージの広がり背後に置いて考えてみても良いであろう。つまり、この句から感じられる情緒というものは、和歌の伝統を意識した句作りによるのである。

さらに、もう一つ、この句を考える上で見落とせない要素がある。それは、中世以来の歌学の禁制にまつわることである。この句の「見渡せば」という言葉は、『芭蕉句解』（東海吞吐著、明和六年稿）にも「見渡せばとは歌にはみだりにゆるしなき言葉なり」と指摘があるように、歌学の伝統では禁制のある言葉であった。また既に堀信夫氏の指摘にもあるように、中七の「詠れば見れば」という部分もやはり禁制に関わってくる言葉である。中世以来の歌学においては「見渡す」「詠る」を初五に置くことを嫌う禁制や、「詠る」と「見る」とはどう違うかという議論などもあったのである。芭蕉の句の特徴を考えるために、戸田茂睡の『梨本集』（元禄十一年撰）を引用してみたい。

一、ながむれば 一、見わたせば

これをも初五文字におくべからずといへり。そのわけを知らず。ある人の云、「見わたせば」といふは、たゞ物を見るばかりのことにはあらず。「柳桜をこきませて」といふも、柳と見、桜と見たしたるなり。定家卿の「花も紅葉もなかりけり」とよまれたるも、花と紅葉と二つなり。たゞ一つを見ることにはあらざるなりと言へり。これまた僻言なり。古歌を見るに、十首が九首は「見渡せば」と言ひては霞一つを読めり。霞は海川野山まで一面に霞みて、雲霧煙などのやう

に一きり一きりに立つものにはあらず。それゆゑ、こなたよりあなたへ見渡す心なるべし。只物を見るばかりの事と思ひて読みては、「渡す」といふ詞のかひ無し。斯様にさへ心得て読みたらんには過はあるまじきにや。但し、ふかき口伝のあるも知らず。

（『梨本集』第一 初五字に置くべからずといふ詞）

この『梨本集』での戸田茂睡の試みは、中世からの因襲的な歌学に対する近世的理性による批判検討として、またひいては国学の先駆として、歌学史の上で評価されるものである。この茂睡の試みは、批判の対象とするものに対し理論的な議論で正面から取り組み、それを存在の根拠から崩し去つてしまおうという試みである。それに比べ、先程の芭蕉の句はどうであろうか。芭蕉の句の作意は、「見渡せば」「詠れば」「見れば」と三つの同意語をたまた重ねて用いている点にあった。これらの言葉は、長い伝統を持つ和歌の世界において頻繁に使用されてきている言葉である。いわば手垢にまみれた月並みな言葉であると言つてもよいだろうし、あるいはまた、それだけの歴史を背負つた意味のある大切な言葉だとも言えるかもしれない。しかし、そのような難しい言葉であるにも関わらず、リズム良く三つたたみ重ねて用いていると、そこには即興的で生き生きとした気分が生まれてきているのである。そして、その三つの言葉のみで、具体的な「須磨の秋」の景物にふれることもなく、『源氏物語』に代表される平安朝以来の「須磨の秋」の情趣を感じさせるのである。つまり、茂睡の試みが、禁制という因襲的なものを、理論的な議論により相対化することで根本から破壊しようとしているのに対し、芭蕉の方は同じ

ものを遊戯的な趣向によって相対化し、いわば骨抜きの状態にしてしまっているようなのである。つまり、芭蕉の句は、中世以来の和歌の伝統、すなわち和歌の道といったものを成り立たせている一つの要素であるところの禁制をことさら無視したような言葉の使い方、つまり「道ヲ無^{ナク}」するような言葉の使い方をしながら、しかも伝統的な和歌の言葉にこの句の表現のすべてを委ねているという、逆説的な「芸当」を持った句であるということができらう。

以上の考察からも、一見単純な「遊び」とか「芸当」と思われる芭蕉の試みの性質の一面はうかがわれる。次に、先程の付合に話を戻したいのであるが、もちろん先程の付合とこの発句とは作意も趣向も異なっている。しかし、両者には、従来からの伝統的な規範、あるいは常識といったものが問題にされているという共通点が見られることを指摘した上で、本稿の目的である「鳶の付合」における芭蕉の作意の再検討に移りたいと思う。

四

さて、まず手初めに、前句の「蒜の籬に鳶をながめて」に描かれている場面を考えてみよう。「蒜」というのはヒル、詳しくはオホビルで、にんにくのこと。その蒜の生えている籬があるというのだから、農家の庭先などの情景を想い浮かべることができようか。「蒜の籬」と「鳶」という組み合わせは、素朴で親しみやすいものと思われる。

しかし、ここで一つの問題が生じる。先程確認したように、この前句は和歌の前書を志向していた筈であった。にも関わらず、

ここで描かれる「蒜の籬」と「鳶」などは、歌語として認められるような題材ではない。つまり、この句は形としては和歌の前書を志向していても、その内容は決して和歌的な情景を扱ったものではないのである。これを、実際に和歌における「蒜」と「鳶」の用例を挙げることで確認しておきたい。

君がかすよるの衣をたなばたはかへしやしつるひるくさし
とて

皇太后宮陸奥

(『後拾遺和歌集』 卷第二十雑六俳諧歌)

勅撰集で「蒜」が詠まれている歌はこれが唯一であり、しかも俳諧歌である。和歌においては「蒜」が好んで取り上げられるということとはなかったのである。

次に、この付合の主役と言うべき「鳶」だが、これは勅撰集に先例を見ることができない。慈円の『拾玉集』に一首ある。

とびからすとぐらとやせんかねてよりわがみのえだもおそろしきかな

(『拾玉集』 厭離百首(文治三年十一月晦日三時之間詠之和同行述懷)の内、雑五十首)

「とぐら」は「鳥栖」あるいは「鳥座」、「埒」で、鳥の夜寝るところをいう。「わがみのえだ」というのは、「私の一族、子孫」ということであろう。中世以前の用例で、管見に入っただけの歌だけである。近世のものでは、数例を拾うことができるが、いずれも芭蕉より後の時代のものである。

このように、和歌における「鳶」の用例は非常に少ないのだが、俳諧での先例を探してみれば、比較的多くのものが見付かる。芭

蕉の時代以前のものでも、『桜川』に二句、『詞林金玉集』に五句、年代が下るにつれてはさらに多くなり枚挙に暇がない程である。つまり、蕉という題材は、和歌ではなく俳諧という分野において育まれた素材であると言うことができるだろう。

さて、以上のように見てくるならば、この前句は、形としては和歌の詞書を志向していながらも、内容においては、和歌には描かれることのなかった情景、むしろ俳諧的な情景を表現しているということになる。

さらに、次の付句の「蕉のある花の賤屋とよみにけり」を考えてみても、「蕉」に関しては、今まで述べてきた通りであるし、「花の賤屋」という特徴的な言葉も和歌には用例の見出せない言葉であって、芭蕉の造語である可能性が高い。この付句も、形としては詞書に続く一首の和歌を志向していた筈であるが、結局はここでも和歌に詠まれることのなかったものが表現されているのだと言えるだろう。

五

一句ずつ検討すれば以上のようになるが、今度は二句を付けた場合で考えたい。私は、そこに一句ずつ見ていたときには意識されなかったことで、二句付けた場合に初めて臆気に浮かび上がってくる、あるイメージが存在するように思うのである。改めて言うならば、一句ずつで見たときに、それぞれの句の主題は「蕉」である。前句は「蕉」と「蒜の籬」という組み合わせを構成したものである。次に付句は、「蕉のある花の賤屋」を題材に和歌を詠んだ、ということであつたのだから、今度も蕉が主役である。

一首の和歌を志向しながら、非和歌的な「蕉」という題材を句の中心として扱うという、珍しく印象的な趣向である。

ところが、このような二つの句を並べて付合として見てみると、「蕉」の文字が二つの句の中で繰り返されることになる。すると、その主役である「蕉」という言葉の持ついた珍しさ、鮮やかな印象といったものは、繰り返されることによって、やや薄らいでしまうように感じられる。そしてそれに代って、今までは「蕉」の珍しさの影に隠れていた何かが、そこに浮かび上がってくるように思われるのである。ではその浮かび上がってくる何かとは、一体何であろうか。私が思うに、それは「一人の或る人物の姿」である。すなわち、蒜の籬に蕉を「ながめて」いて、蕉のある花の賤屋と「よみにけり」という人物の姿なのである。そうであるならば、この付合は、一つの情景なり場面なりが、この或る人物の視線を通して、一首の和歌として生まれてくるまでの過程を表現したものだとも考えられるのである。たしかに、この人物に関しては、年齢や職業、身分といった具体的なものは何も描写されていない。しかし、我々は、ここでその正体不明の或る人物が、何かを見つめて、詩を生み出す、その生々しい場面に立ち会っているのであり、この人物の存在を強く感じることができるのである。

ここにおいて、この付合における芭蕉の「芸当」の興味深い一面を見ることができよう。一首の和歌とその詞書を想定し、蕉に蕉を付けるといふ一見理屈の勝った趣向ではありながら、ユニークな一人の人物を描き出すことに成功しているのだ。この人物、検討してきた付合の内容からすれば、尋常の美意識、価値観を持

った歌人などではなく、かなり個性的な、ある種の隠遁者のような人物を想像させる。

もちろん、以上のようにこの付合を読むことに否定的な向きもある。たしかに、この付合の作意とは、木因が見破ったごとく、一首の和歌と、その詞書を仮想したところにあつた。先に引用した芭蕉自身の「自慢之詞」からも、そのことは明らかである。しかし、荻野清氏^①が指摘するように、歌の詞書を趣向としたものならば、前年（天和元年）秋の『次韻』に

とりあへず狂哥仕る月

才丸

秋の末つかた嵯峨野をとをり侍りて

揚水

というものが、すでに見られるのである。芭蕉の作意はこの趣向をさらに上回り、同物の難をかわす「芸当」まで備えたものであつたが、それと同時に句の内容の上、すなわち取り上げられた題材を比較してみても、芭蕉の付合の持つ独自性は明らかである。

六

さて、以上では和歌の世界を念頭に置いた上での検討を加えてきたわけであるが、前句の「籬」と「ながめて」という言葉に注目するならば、陶淵明の「采菊東籬下^② 悠然見南山^③」（『飲酒二十首』第五）という詩句の存在を思い出すことができるのではないだろうか。

改めて解説するまでもなく、これは、村里外れの俗離れた風物の中で日々を送る安らかな隠者の心境を詠んだ詩である。後のことであるが、元禄五年秋に書かれた「芭蕉を移す詞」でも芭蕉はこの詩句を踏まえている。また、『類船集』には菊と陶淵明、

籬と菊は付合語としての記載があり、これらの言葉の持つイメージの密接な関係を示している。とすれば、芭蕉の付合の「萩の籬」という言葉は、淵明の「菊の籬」を意識したものであり、「焉をながめて」は「悠然見南山」を念頭に置いた上でのことであると考えられよう。つまり、この付合は、陶淵明という漢詩の世界の代表的隠遁者を意識したものであつたのである。

先の検討によれば、この付合は一首の和歌とその詞書を想定してはいるが、描いている情景はおよそ非和歌的なものだといふことであつた。また同時に、陶淵明を通して漢詩の世界をも意識したものだといへ、^④「菊」は「萩」に「南山」は「焉」にされてしまっているのである。これはつまり、和歌、漢詩、両方の世界を俳諧化しているということになるのではないだろうか。

以上のように見てくると、和歌の世界と比べても、漢詩の世界と比べても、最後にこの付合に浮かんてくるのは一人の隠遁者の面影である。そして、和歌の世界、あるいは漢詩の世界を志向してはいるが、この隠遁者の表現しているものは、やはり俳諧の世界なのである。

七

ところで『校本芭蕉全集』補遺編（富士見書房、平成三年）には、四季の発句と共にこの付合が書かれている懐紙が収録されている。

摘けむや茶を風の秋としらて

時鳥まねくか麦のむら尾花

（風鳴）
□□柱か屋漏の句を□□

はせを野分して盤に雨を聴夜哉

深川□□

檐声波を打て腸氷る夜や涙

或人の□□^吟□□^{けるに予}□□

付句

にらのまかきに鳶をなかめて

鳶の居る花の賤屋とよみにける

泊船堂芭蕉翁

この懷紙にのる発句はどれも延宝八年か天和元年頃の作品である。いずれも当時、新風を模索していた芭蕉の、いわば実験的な句であると言つてよいだろう。まず最初の春の句と次の夏の句であるが、これはやはり和歌の伝統を意識した句作りになっている。最初の春の句に見える「風」は、俳諧では冬の季語となっているが、和歌の世界ではこれを秋季のものとしても良いとする意見があり、議論にもなった。そのようないきさつを踏まえての作句であるとは、すでに指摘されているところである。また、次の夏の句の「むら尾花」は、普通和歌では芒の穂のことで人を招くものとして詠まれるものである。しかし、麦の穂を尾花と見立てるならば、季節からして時鳥を招くのだらうと興じた句であり、「尾花の招は歌也、麦の招は俳諧にして滑稽と云べし」(『笈の底』^信天翁信胤著、寛政七年稿)という評が参考になる。また「芭蕉が談林から蕉風に移らうとする過渡期の作で、言葉の技巧や譬喩等による滑稽から転じて、和歌、連歌の趣味に対立した俳諧的境地を、別に求めようとしてゐた当時の傾向が、最もよく現はされて居る」(『芭蕉俳句新譚』^①頼原退蔵著)というように評価することもできるだろう。三句目と四句目については改めて贅言するまでもなく、いわゆる漢詩文調の作である。両句とも芭蕉が深川の草庵で

生活する中での実感のこもったものである。

さて、そこでここに並べられた四季の発句を改めて見直してみれば、和歌や漢詩文を視野におさめながらあるべき俳諧の姿を模索する芭蕉の姿勢が、はつきりと見えてくる。春と夏の句は、秋冬の句の緊張感には及ばないとする意見もあるが、芭蕉の姿勢としては四つの句に共通したものを読み取ることができる。そしてまた、この四つの句に共通した姿勢とは、先に検討した付合にも共通に見られた姿勢であった。とすれば、先に付合を検討した結果辿り着いたところの、芭蕉が描き出した隠遁者の面影というもの、やはり芭蕉自身の姿だったのではなからうかと思われてくる。いわばこの付合は、自らの理想の姿を模索する芭蕉の自画像なのではないかと考えるのである。

八

ここで、この書簡の前後の時期の芭蕉と木因との交渉を顧みておきたい。二人の交渉を示す資料の初出は、木因の参加した「空樽や」^②百韻に芭蕉が加点した延宝八年とされる。この時、すでに二人が相識の間柄であったかどうかは不明であるが、翌年七月に木因が江戸へ下り、芭蕉、素堂に面会したことはよく知られている。そしてこの「鳶の付合」をめぐるやりとりが交わされたのは、それからわずか半年後のことであった。さらに、貞享元年、芭蕉は『野ざらし紀行』の旅の途次に木因を訪ね、幾日か滞在した。やがて芭蕉は木因と連れ立ち大垣から桑名へ向かう。その折の様子は『桜下文集』所収「句商人」の一文よつてうかがうことができる。そこに見られる二人の唱和は、見事に呼吸の合ったもので

あるが、とくに冒頭の木因の句と、結びの部分の芭蕉の句との照応が興味深い。⁽⁹⁾

佗人ふたりありや。つかれ姿にて狂句を商ふ。しらぬひのつくしに松浦瀉ばちにもあらず、清き渚に玉拾ふいせ嶋ぶしにもあらで、紙子かいどりとて道行をうたふ。

歌物狂二人木がらし姿かな 木因

（中略）

名古屋に佗居して狂句、

風の身は竹斎に似たる哉

はせを

貞享甲子孟冬

これを見ると、木因との唱和が、『冬の日』の吟調の成立に大きく関わっていたことがわかる。前の章で検討した内容を併せて考えれば、『次韻』、『武蔵曲』から『虚栗』を経て『冬の日』へと向かう芭蕉の歩みの過程に、『蕉の付合』も確実にその位置付けをすることが許されるであろう。この小論の冒頭で触れたごとく、後々の伝書、作法書に、この付合の記事が取込まれていくのは、この付合が蕉風樹立の重要な契機を含んでいたことに起因すると思われる。

おわりに

以上のように考察を進めると、芭蕉にとって、この付合に見られた趣向は、やはり単純な遊戯的趣向というようなものではなく、新しい俳諧を求める自らの姿を奇抜な方法で強烈に表現する、そのために必要な手段であつたのだと考えられる。書簡の記

述にもう一度戻って言うならば、「予が心指ヲ了察の士」が「一兩人」しかいなかったというのは、それだけこの付合が独特なものであったからである。にもかかわらず、木因が芭蕉の作意を見抜いたということは、つまり二人の新しい俳諧に対する理解にそれだけ共通の部分があつたということである。鳴海の知足と芭蕉を結びつけた仲介者としての可能性が、木因についていわれているが、当時の芭蕉にとって、木因はそういう意味でも非常に貴重な理解者であつたし、また句の応酬を通じては心強い共同作業者でもあつたのである。

注(1) 『詳譜伝授廿五箇条 貞徳正伝』（早稲田大学図書館蔵）、『俳諧秘決抄 口授伝』（大垣市立図書館蔵）を参照した。

(2) 『晋家秘伝抄』（筑波大学図書館蔵）、『二十五箇条』（古典俳文学体系『蕉門俳論俳文集』所収）、『芭蕉翁二十五箇条夜話』（古典文庫『芭蕉伝書集』所収、『或問珍』（俳諧文庫『風雪全集』所収）、『季吟家二十五条』（加藤定彦先生蔵本）等を参照した。

(3) 岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』（明治書院、昭和42）所引。

(4) 同右

(5) 『松尾芭蕉集』（日本古典文学全集 小学館、昭和47）による。

(6) 佐佐木信綱『日本歌學体系』第七卷（風間書房、昭和32）による。

(7) 以下、和歌の検索、引用共に『新編国歌大観』（角川書店）による。

(8) 『楳取魚彦家集』（安永五年／＼六年の作品）、『草径集』（文久三年刊）の短歌『柿園詠草』（嘉永七年刊）の長歌にそれぞれ一例ずつ見られる。

(9) 『和漢三才図会』の「蕉」の項には、

夫木

仲正

鶯のある井杭の柳なばへしてめぐみにけりな春を忘れず
という記載がある。ところが『夫木和歌抄』を調べるとこれは誤りだ。

家集 源 仲正

そびのある井くひの柳なばへしてめぐみにけりな春をわすれず
というのが正しい。「そび」というのは「鳩」であり、「かわせみ」の古名。

『夫木和歌抄』卷第三、春部三

(10) また『西鶴織留』(三ノ二)にも「今時の点者といふをみれば……中略……鹿のうちこしに紅葉鳥をしらす、有馬の湯は水辺に成事も、鴟は俳諧やら鳥は連歌やら、何をひとつも聞分る事なし」とある。(『定本西鶴全集』七巻による)

(11) 『校本芭蕉全集』書翰篇(角川書店、昭和39)による。

(12) 『詩人玉屑』(寛永十六年版、早稲田大学図書館蔵)を参照した。

(13) 『貞享式海印録』には「若し菊の柵とあらば、さは(前句を歌の詞書とは)見たてられまじ。」(『校註俳文学体系』による)との評がある。

(14) 伝書、作法書には、この付合で「鶯」の字を重ねたことを「疊字」(『芭蕉翁二十五箇条夜話』、『貞享式海印録』、あるいは「盈字」(『晋家秘伝抄』、『俳諧古今抄』)と呼ぶものがある。これはちょうど、漢詩でいう疊韻、またあるいは蠅聯体といったものを意識していると考えられよう。和漢の詩歌では常のことであるが、俳諧でこの格を用いたのはこの芭蕉の付句を濫觴とするとの説も

『芭蕉翁二十五箇条夜話』、『俳諧古今抄』なされる。

(15) 『松尾芭蕉集』(『日本古典文学全集』小学館、昭和47)による。

(16) 岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』(明治書院、昭和42)所引。

(17) 同右

(18) 白石佛三・田中善信氏『永遠の旅人芭蕉』(新典社、平成3)

の第二部(白石佛三氏執筆)による。

(19) 森川昭氏編『谷木因全集』(和泉書院、昭和57)、森川昭氏「新出芭蕉評卷二点をめぐって」(『文学』昭和52、5月号)、「冬の日前後の芭蕉と知足」(『連歌俳諧研究』55号)を参照した。

(20) 「句商人」の引用は『谷木因全集』による。

『付記』本稿は、近世文芸研究と評論の会平成四年五月例会における口頭発表をもとにしたものである。徳田武先生からは発表後貴重な御教示をいただき、加藤定彦先生からは稿を成すに当り、御教示とともに御架蔵の資料の御提供をいただきました。『誹諧伝授廿五箇条 貞徳正伝』、『俳諧秘決抄』口授伝、『晋家秘伝抄』も加藤先生の御教示によるものです。さらに、終始ご指導下さった雲英末雄先生を始め、ご助言を下さった多くの諸先生、諸先輩方に厚く御礼を申し上げます。